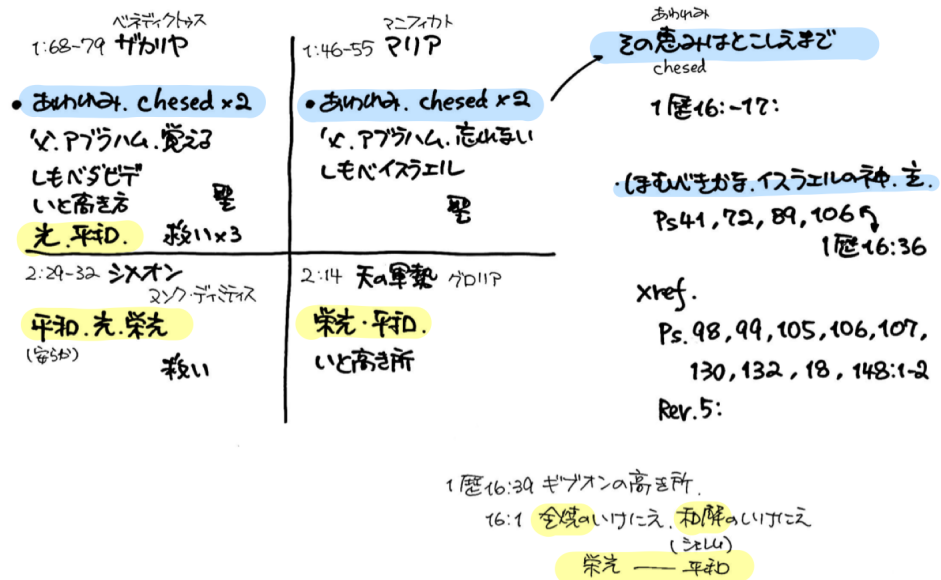




ルカ福音書 1-2章  
イエスの  
幼年物語における詩歌

ルカ1:1-2: エルサレムにおける詩歌

2020.12.1



ルカ福音書1章と2章。主イエスが生まれるところ。そして、バプテスマのヨハネが生まれるところ。ここに4つの歌があります。

マリア、ザカリヤ、天の軍勢、そしてシメオン。この4つのものが、マニフィカト、ベネディクトゥス、グロリア、ヌンクディミテイスと言って、よく歌で歌われたりするものです。この4つの詩篇、詩歌に繋がりがあがり、連携して繋がっている。そして、ひとつのまとまりとしてこの詩を見るようにというように編集されているものだと思います。

前に見たときは気がつかなかったのですが、今回見ていた時に「ほむべきかなイスラエルの神、主」。この「ほむべきかなイスラエルの神、主」いう言い方を詩篇を知っている人達は聞いたら「あつ」と思い出すはずなのですね。それはどこなのかと言うと、41篇の最後、72篇の最後、106篇の最後、89篇も似ている終わり方です。4つとも第1巻の最後、第2巻の最後、第3巻の最後、第4巻の最後に「アーメン」の長いものとしてついているような感じで、その巻の終わりにある言い方です。

特にダビデの「エッサイの子、ダビデの祈りは終わった」という72篇。72篇の「ほむべきかな神、主、イスラエルの神。ただ主1人奇しいわざを行う。とこしえにほむべきかな、その栄光の御名、その栄光は地に満ち渡れ。アーメン、アーメン。」この言い

方、この「ほむべきかな神、主、イスラエルの神」という言い方を見たら、ザカリヤの歌の出だしを思い出してしまうなわけです。

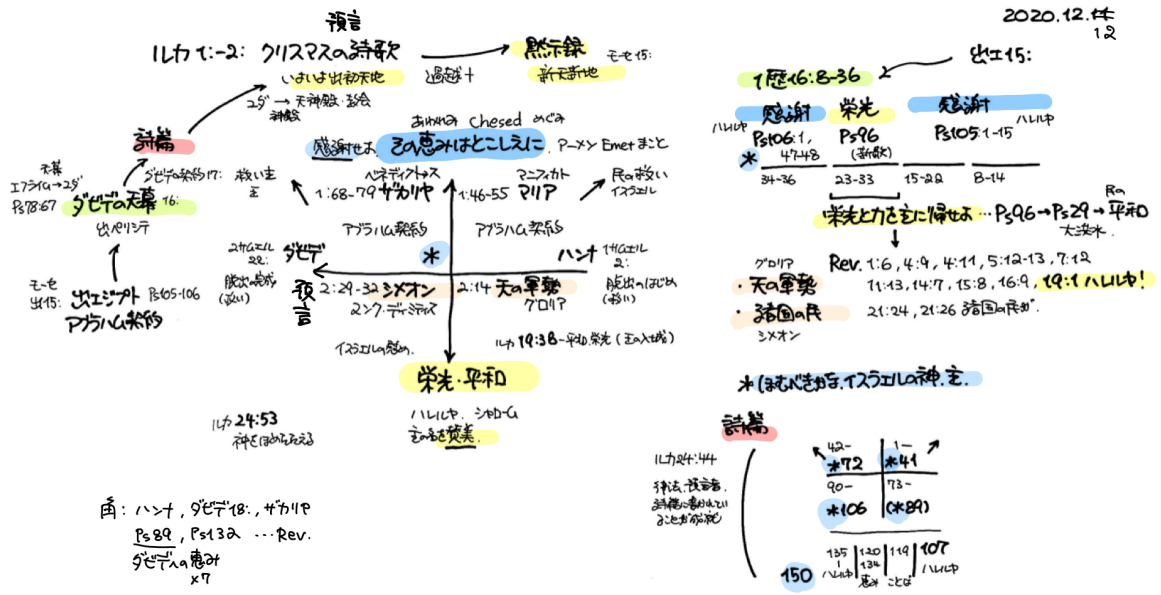
それで見えていくと、106篇の終わりのところが特に思い出されるところではあるのですが、クロスリファレンスでこの芋づるをちょっと眺めただけでも99、98、107、107、107、107、106、106、106、105、105、106、107、105、106、107、107は第5巻の出だしですね。105、106は「ハレルヤ」という言葉で囲まれているハレルヤの詩篇の連続しているものです。105と106を思い出す言い方で構成されている。ダビデの契約も132がありますから、132もこの辺に入っていますよね。

1巻から4巻までを受けて第5巻全体が107で始まる「ハレルヤ」で始まって「ハレルヤ」で終わる巻物になっていますので、この「ほむべきかなイスラエルの神、主」。この言い方を見たら「主に感謝せよ」というところで始まっているダビデが契約の箱を天幕に持ってきた時に、うた歌いたちに命じた歌を思い出す。「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」

この「恵みはとこしえまで」というのは、136篇にいっぱい何度も何度も「キー、レオラム、ハセドー」というこの言葉がたくさん出てきます。この「恵みはとこしえまで」という言い方で、それは「アーメン」の長いような感じでしょうかね。

その言い方を見ていくと、このルカ福音書の4つの詩篇の中で一番多く出てくるのは「あわれみ」ということばなのです。「主のあわれみ」「主はあわれみ」、ここも「あわれみ」。それともう一個「あわれみ」があります。「あわれみ」とは、ここに「真実の愛」という脚注がついていたりします。この「あわれみ」と言っているのは、その恵みはとこしえまでの「恵み」と同じ言葉になるものです。ルカ福音書はギリシャ語で書いてありますけれど、ここで歌っている歌は、そもそもヘブル語で歌われました。アラム語とも言われたりもしますが、ヘブル語で歌われたものですので、それをギリシャ語に翻訳されて記録されています。ですから元々のヘブライ語を裏に見て、それで思い出するというのが適切だと思いますけど、この「あわれみ」と言ってる言葉は、その恵みはとこしえまでの「恵み」を思い出すと。「ヘセド」ですね。契約に忠実な言った通りにしてくれるというあわれみ、恵みということですね。この「契約を忘れない」という言葉がこの歌の中心になっていますので、この2つ、マリアとゼカリヤの歌をまとめると、「その恵みはとこしえまで」という歌だということが言えるんだと思います。

この「ほむべきかなイスラエルの神、主」で、105、106、107というのを見た時には何を思い出さないといけないかと言うと、第1歴代誌の16章、ダビデがペリシテ人から取り戻した契約の箱を幕屋に安置した時の賛美の歌です。ここに「主に感謝せよ」というところから始まる歌があります。この歌は105篇の出だしと、106篇の出だしと終わりに、「主に感謝せよ。主は恵み深い。そのいつくしみはとこしえに変わることがない。」と。その「いつくしみ」のところが「恵み」ですかね。それと真ん中に96篇が入ってるという、105篇のハレルヤと、106篇のハレルヤに囲まれて、106篇がサンドされてるような歌。たぶん逆で、この第1歴代誌16章の歌を使って、105篇、そして106篇を歌い、ここから取り出して96篇になっていると思いますけど、この3つはセットで見てくださいねと言わんばかりの構成になっています。



105、106、96は、全部第4巻の中に入っています。第4巻の真ん中に、96、97、98、99と「主は王である」という新しい歌がまとまっています。この96篇を見ると(第1歴代誌16章でもいいのですが)、「主に帰せよ、栄光と力を主に帰せよ、御名にふさわしい栄光を主に帰せよ」この「主に帰せよ、栄光と力を主に帰せよ」と言って歌っている歌なのですが、「栄光と力を主に帰せよ」という歌は、この96篇では、29篇からの引用なのか、29篇がそこから引用したものなのか、どちらがどっちだか分かりませんが、29篇もこの同じ「力あるものの子らよ、主に帰せよ。栄光と力を主に帰せよ。御名の栄光を、主に帰せよ。聖なる飾り物をつけて主にひれ伏せ。」これは96篇そのままですね。主の声のさばき。「すべての者が栄光と言う。大洪水の時に御座に着かれた。」このさばき主が御座に着いたという歌をこの96篇で歌い、それを幕屋が作られた時に、その王座、契約の箱が入ってくる時に歌うのは、実にふさわしい。主は王だということを歌っている歌として引用するのは、実にふさわしいものだと思います。

この「感謝せよ」そして「栄光と力」「感謝せよ」と。「恵みはとこしえまで」「その栄光を褒め称える」「主に感謝する」というこの「栄光と力」の部分というのが、この天の軍勢の歌とシメオンの歌の中に、栄光があります。栄光の話は、バプテスマのヨハネの話のところから続いて出てきます。ここで「栄光と平和、救いの光、栄光、そして平和のうちに去らせてくださる」というこの「天の軍勢が栄光を褒め歌う」、「力と栄光を主に帰する」これは、黙示録でまさに何度も何度も出てくることです。「栄光と誉れと力」「力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美」、「賛美と誉れと栄光と力が世々限りなく」、「賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、勢い」、「栄光を帰せよ、栄光を帰せよ」。そして、ハレルヤという言い方が直接最後のところに出てきますね。ハレルヤコーラスはここから来ています。「ハレルヤ、救いと栄光と力は我らの神、主のもの」。これは天の大群衆が歌っています。ですから、まるでこの黙示録の最後のハレ

ルヤの大合唱、「栄光と力を主に帰せよ」ということを歌う大合唱をあらかじめ、生まれた時に聞いているかのような、短いですが、ここで栄光を褒め称える大軍勢が御使いと一緒に歌っているということが出てきますので、その栄光と力を賛美することは、この黙示録の中で成就しているような感じです。

そして、シメオンの歌の中に「全ての異邦人を照らす啓示の光」とあります。全ての国々がその栄光を見る、栄光を表すということだと思いますけど、黙示録の中の栄光の最後の方の21章の終わりのところを見ると、「国々の民が、地の王たちが栄光を携えてくる。栄光と誉れを携えて全世界の国々が集まってくる」というところで、この黙示録が終わっていきます。それは、このシメオンが歌っていたところということになると思います。ですから、この天の軍勢の歌、グロリア。シメオンの諸国の民が栄光を見るという歌、これが黙示録では成就しているということがここに見えると思います。「主に感謝せよ」そして「主に賛美せよ」と。「感謝する」、「賛美する」というような構成でこの4つが分けられるのだらうと思います。

先ほど言っていた「ほむべきかなイスラエルの神、主」これが詩篇全体の5巻。1、2、3、4、5巻に分けた最後の所にみんな付いていますね。150篇はそのまま長いですけど、ハレルヤの長いものということになりますので、この言い方が詩篇全体を引用しているかのようなことになるかなと思います。「その恵みはとこしえまで」という言い方で、「律法と預言者と詩篇に書かれていることがすべて成就します」というのは、同じルカ福音書の終わりの24章44節に出てきます。他で「律法と預言者と詩篇」という組は出てこないですね。普通は「モーセの律法と預言者」という言い方で古い書物を表しますけども、ここだけは「律法と預言者と詩篇」と書いてあります。まさにこの詩篇全体が、いよいよ成就するんだということが、この4つの歌で表されているところになるかと思えます。

マリアの歌とシメオンの歌。これは特に民が救われるということが中心じゃないかと思えます。ザカリヤと天の軍勢の歌は、救い主が来ると。民の救いと救い主が来る。天の軍勢が歌っているのは、ルカ福音書19章38節で、主イエスがエルサレムに来る時に、王様が入場する時に同じような歌を皆が一緒になって歌っているんですね。そういうのを見ても、この天の軍勢が歌うのは、王を褒め称えるということで、こちら(天の軍勢、ザカリヤの歌)は、救い主である王がいよいよ来ますと。マリアとシメオンの歌は、民が救われるんだと約束の救いが全世界に来るんだということで、この4つを分ける区分になっているのじゃないかと思えます。

ハンナの歌のようなものとしてマリアの歌を思い出したりしますよね。不妊の女のハンナ。それでサムエルが生まれるというところは、バプテスマのヨハネも思い出します。ヨハネという名前はハンナと同じ名前のようなものですね。ヨハンナとハンナという名前です。そのハンナの歌は、詩篇がまだ編集されていない1個も詩篇としてまとめられる前の時代、サムエルのお母さんで、敬虔な女性のルツやハンナという人たちの歌からこの救いが始まっていく。そして、ダビデの第2サムエル22章にある歌、詩篇18篇はそのままですけど、その歌はハンナの歌が成就しているということが分かるような形でダビデが歌っています。

このルカ福音書の4つの詩編、「これはいよいよ脱出の時が来ますよ。ダビデの天幕はペリシテ人の地から脱出しました。そしてエフライムの天幕が捨てられて、ユダの天幕に帰られました。」というこの大きな時代の転換です。それで、その後にダビデの契約、このザカリヤのところに書いてあるダビデの契約は与えられています。それで、いよいよ新しい天と地の時代が来る。初めの天地から脱出するというのが、本来の主イエ

スキリストのメサイアとしてきたということの時代の初めなのですが、「いよいよ来るよ」という預言なんですね。これはザカリヤも預言している。シメオンも預言してというふうには書いてるのですが、これから起こることの預言として、「いよいよ、この初めの天地から脱出する。新しい天地に入っていくというストーリーが始まりますよ。」という、ユダの神殿から天の神殿へ、教会へ、ということがこの時代に言われるところなんです。その出だしのところに4つの歌があって、ハンナの歌がダビデの歌で成就したように、この4つの歌は黙示録で成就すると。黙示録の中にこの4つの歌の成就がたくさん入っている。黙示録は歌しか書いてないような書物ですよ。音も音量もすごいですね。黙示録を歌として見るならば、「ハレルヤ」と「アーメン」の大合唱なわけですから、最初のアーメンとハレルヤが、このクリスマスの4つの歌、いよいよ脱出しますよ。そしてルカ福音書は、その御霊に満たされて賛美するという。それが生きるということですよということを強調しているような、賛美する民が作られていくということがテーマですので、いちばん最後の24章の最後には、「宮で神をほめたたえていた」というところでルカ福音書が終わります。

出エジプトも思い出さないといけなかったですね。105、106は、エジプトから出たところのハレルヤでした。モーセの出エジプト15章を思い出す。そういう出エジプト記を記念するハレルヤから始まって、ユダの天幕のハレルヤ。そして新しい天地のハレルヤに繋がっていく。最後の黙示録の15章には、モーセの歌と子羊の歌という言い方も出ていますが、こういう大きな芽づるですね。芽づるが黙示録につながっていく時代、その「いよいよ始まるよ」というところのこの4つの歌が、ルカ福音書の最初に記録されているということだと思います。